

## 第七章 植民地（一）

### 第一部 新植民地設立の動機

欧州諸国がアメリカと西インド諸島に最初の植民地を築いたときの動機は、古代ギリシアやローマが植民地を設けたときほど、必ずしも単純でも明らかでもなかった。

古代ギリシアの都市国家はどれも領土が小さく、その領土が無理なく養える人数を超えて人口が増えると、住民の一部を遠方へ移し、新たな居住地を求めさせた。四方は好戦的な隣国に囲まれ、本国で大きく領土を広げることは難しかったからである。ドーリア人の植民は主にイタリアとシチリアへ向かい、ローマ建国以前のこれら二つの地には、当時「野蛮」「未開」と見なされた人々が住んでいた。他方、もう一方の二大部族であるイオニア人とアイオリス人は小アジアとエーゲ海の島々に植民し、そこに暮らす人びとの社会の水準も、当時はイタリアやシチリアとおおむね同程度であった。母都市は植民市を庇護すべき「子」と見なし、感謝と敬意は求めたが、直接の支配や管轄は主張せず、あくまで「自立した子」として遇した。植民市は自ら統治のかたちを定め、法を制定し、長官を選び、周囲との講和や戦争も独立国として自分で決し、母都市の承認や同

意を待つ必要はなかった。要するに、こうした植民を生んだ利害は、きわめて単純明快であった。

ローマは、多くの古代の共和政国家と同じく、公有地を市民に一定の割合で分け与える「アグラリア法」に立脚して始まった。だが、婚姻・相続・売買が重なるうちに当初の地割りは崩れ、もとは多くの家族の生活を支えた土地が、しばしば一人の手に集中した。これを正すため、市民一人の保有上限を五百ユゲラ（約三百五十英エーカー）約百四十ヘクタール）とする法が設けられたが、実際に施行されたのはせいぜい一、二度と伝わるのみで、やがて無視や抜け道が横行し、財産の不均等は拡大し続けた。かくして土地を持たない市民が多数となり、当時の慣習のもとでは、自由民が独立して暮らしを立てるのは難しかった。今日であれば、土地がなくとも少しの元手で小作に出たり小売を営んだり、元手がなくとも農業労働や手工業で雇用を得たりできる。ところが古代ローマでは、大農園の耕作は奴隷が担い、監督も奴隷であったため、貧しい自由民が農夫や日雇いとして雇われる余地は乏しかった。商業や製造業、さらには小売に至るまで、富者の奴隷が主人の利益のために営み、その富と威光と庇護の下では、貧しい自由民は競争を保ちがたかった。ゆえに、土地を持たない市民の暮らしの支えは、毎年の選挙で

### 3 第七章 植民地（一）

候補者が施す飲食のもてなしや贈り物に、ほとんど限られていた。護民官は、富者・権門への不満を高めたいとき、昔の地割を持ち出し、こうした私有制限の法を共和国の根本法だと讃えた。民衆は土地を求めて声を強め、富者・権門は自分の土地を分けまいと固く心に決めていた、と見て差し支えない。そこで民の心をなだめる策として、新たな植民の派遣がたびたび提案された。だが、征服を重ねたローマには、行き先の定まらぬ広い世界へ市民を運任せに送り出す必要はなかった。共和国の支配下にあるイタリア各地の征服地に彼らへ持分の土地を割り当て、版図の内にとどめたのである。そこでは独立の国を作る余地は与えられず、せいぜい内部の統治のために自治の規則を定めうる一種の団体にとどまり、つねに母都市の監督と司法・立法の権限に服した。この種の植民は、民衆の不満をいくらか和らげるだけでなく、服従のあやうい新征服地に事実上の駐屯地を置く役割もしばしば果たした。ゆえに、制度の性格でも設置の動機でも、ローマの植民はギリシャのそれとは大いに異なる。それを示すように、両者を指す原語の意味も大きく違う。ラテン語のコロニアは単に「入植・植民」を、これに対してギリシャ語のアポイキアは「家から離れて住むこと、出立」を意味する。とはいえ、ローマとギリシャの植民はいずれも、抗いがたい必要、または明らかな有用性から生まれた点では同

じであり、設立を促した利害はどちらも明快であった。

一方、アメリカおよび西インド諸島での欧州の植民地設立は、差し迫った必要に迫られて生まれたものではなかった。のちに大きな利益をもたらしたのは確かだが、その利点は当初から明らかだったわけではない。その有用性は設立の時点では理解されておらず、植民地をつくる決定にも、そもそもその発見を促した動機にもなっていなかった。さらに、その効用の中身・及ぶ範囲・限界については、今日に至るまでなお十分に理解されているとはいえない。

十四世紀から十五世紀にかけて、ヴェネツィアは香辛料をはじめとする東インドの産物の交易で大きな利益を得て、欧州諸国にそれらを供給した。主な仕入先はマムルーク朝の支配下にあったエジプトであり、この王朝はトルコの敵で、ヴェネツィアもまたトルコと敵対していたため、利害は一致した。ヴェネツィアの資金力の支えもあって、この結びつきは強まり、ヴェネツィアはこの交易をほとんど独占するに至った。

ヴェネツィアが上げた巨利は、ポルトガルの利益への欲を強くかき立てた。十五世紀を通じて、同国は、ムーア人がサハラを越えて運んでいた象牙と金粉の産地へ、海路で直接至る航路を探し求めた。マデイラ諸島、カナリア諸島、アゾレス諸島、カーボ・ヴ

エルデ諸島を次々に見いだし、さらにギニア沿岸からロアング、コンゴ、アンゴラ、ベングラへと海岸線をたどって進み、ついに喜望峰に到達した。この到達によって、かねて望んでいたヴェネツィアの高収益の交易への参入は、現実味を帯びた。一四九七年、ヴァスコ・ダ・ガマが四隻の船でリスボンを出帆し、十一カ月後にインドスタンの海岸に達した。こうして、ほぼ一世紀にわたり、ほとんど途切れることなく続いた一連の地理上の発見は、ここでひとまず完結を見た。

その数年前、ポルトガルの計画に対する欧州の期待は高まりつつも、なお成功するかどうかは疑わしかった。その折、ジェノヴァ生まれの航海者が「西回りで東インドへ至る」という、さらに大胆な構想を示した。当時の欧州は、その地域がどこにあるのかを十分には把握しておらず、わずかな渡航者は、素朴さや無知から実際よりはるかに長い道のりをほとんど果てしないかのように語るか、あるいは自分の冒険談をいつそう奇抜に見せるため、距離を誇張しがちであった。コロンブスは、東回りが長いなら西回りはそのぶん短いと論じ、西回りこそ最短にして確実だとして、カステイリヤのイサベル女王を説得した。一四九二年八月、彼はバロス港を出航し、ダ・ガマに先立つこと約五年、二〜三カ月の航海ののち、まずバハマ（ルカヤ）諸島のいくつかの小島を、続いて

大島サント・ドミンゴ（イスパニョーラ島）を発見した。

しかし、コロンブスがこの航海で見つけた土地も、その後のどの航海で見つけた土地も、彼が探し求めていた地域とはまるで違っていた。中国やインドスタンの富や耕作の進み具合、人口の多さの代わりに、彼が訪れた新世界のすべての地は、サント・ドミンゴをはじめ、深い森林に覆われた未開の地であり、当時の欧州の言い回しで「裸の哀れな野蛮人」と呼ばれた小さな部族が点在するばかりであった。それでも彼は、そこがマルコ・ポーロの記した国々のどれかに違いないという思い込みに固執し、たとえばサント・ドミンゴの山の名シバオ（Cibao）と、ポーロのいうジバンゴ（Cipango）の響きが似ている、といった些細な一致まで拠り所にして、明白な証拠を無視し、その思い込みに戻ってしまった。フェルナンド王とイサベル女王にあてた書簡でも、発見地を「インディアス」と呼び、そこはポーロが述べた地域の果てで、ガンジス河畔やアレクサンドロス大王の征服地からもさほど遠くないと信じていた。ついに別ものだと悟ったのでさえ、なおその豊かな国々は遠くはあるまいと自らを励まし、のちの航海ではテラ・フェルマ（南米北岸）に沿い、ダリエン海峡の方面を探し求めた。

この誤認の結果、「インディアス」という名は、あいにくその諸地域に長く定着して

しまった。やがて新世界が従来のインドとはまったく別物だと明らかになると、前者は後者と区別して西インド、後者は東インドと呼ばれるようになった。

とはいえ、コロンプスにとっては、発見した土地が何であれ、それをスペイン宮廷にとってきわめて重要だと示すことが肝要であった。ところが、国の真の富をなす、土地が生み出す作物や動植物の産物という観点から見ると、当時はそれを正当化できるほどの価値はほとんど見いだせなかった。

サント・ドミンゴでは、ネズミとウサギの中ほどの姿をした動物コリ（Cori）が、陸にすむ胎生の哺乳類としては最大であり、博物学者ビュフォンはこれをブラジルのアレアと同じ種だと考えた。もともと数は多くなかったが、スペイン人が持ち込んだ犬や猫が、コリをはじめとする小型の哺乳類を狩り立て、やがて個体数を激減させたといわれる。それでも当時、陸で手に入る主な動物性の食べ物は、こうした小型の哺乳類と、イヴァナ（イグアナ）と呼ばれるかなり大きなトカゲであった。

住民が口にする植物の食べ物は、働きぶりがさほど熱心ではなかったため豊かとは言いにくかったが、特に不足していたわけでもなかった。主な作物はトウモロコシ（インディアン・コーン）、ヤム、ジャガイモ、バナナなどで、どれも当時の欧州ではまった

く知られていない植物であった。その後も欧州での評価はあまり高まらず、古くから欧州各地で栽培されてきた一般的な穀物や豆に並ぶ主食とは見なされなかった。

たしかに綿花は、物を作るための大切な原料となり、当時のヨーロッパの人々には、これらの島々の植物から得られる産物の中で間違いなく最も価値あるものに見えた。とはいえ、十五世紀末のヨーロッパでは、東インド産のモスリンなどの綿製品は各地で珍重されたものの、綿工業そのものはどの地域にもまだ根づいていなかった。したがって、この産物でさえも、当時の人々の目には、とりわけ重要なものとは受け取られなかった。

新世界でコロンブスは動植物に大きな価値を見いだせず、期待を鉢物へと向けた。住民の衣装に付いた小さな金片や、山地から流れる小川や急流で砂金がしばしば見つかるという話は、山々に豊かな金鉱があると彼に確信させるに十分だった。こうしてサン・ト・ドミンゴは「金に富む国」と報告され、そのために（当時はもちろん、現代に至るまでの偏見に照らしても）スペイン王冠と王国に尽きることにない真の富をもたらす源と見なされた。初航海からの帰還に際し、コロンブスはカステイリヤとアラゴンの両王の前で凱旋の礼を受け、発見地から持ち帰った主要な産物が荘重な行列の先頭で運ばれた。価値があると言えたのは、細い飾り帯や腕輪といった金の装身具と、綿花の俵



くらいである。残りは、物珍しさをねらった見せ物にすぎなかった。異様に大きな葦、美しい羽の鳥、巨大なアリゲーターやマナティーの剥製などであり、その前には、風貌と肌の色の珍しさゆえに好奇の目を引く、六、七人の気の毒な先住民が歩かされた。

この報告を受けたカステイリーヤ評議会は、自分で身を守れない人びとが暮らす土地を、自分たちのものとすることを決めた。そして、住民をキリスト教に改宗させるといふ信仰にもとづく目的があれば、この行いの不正も「正当化」できるとされた。だが、実際にこの計画を押し進めたほんとうの理由は、そこで金の宝が見つかるという期待にほかならなかった。さらにこの見込みにいつそう重みをもたせるため、コロンブスは、現地で見つかる金銀の半分を王室のものとすることを提案し、評議会はそれを認めた。

はじめのころ、ヨーロッパにもたらされた金の多くは、無防備な先住民からの略奪という、きわめてたやすい方法で集められていた。そのため、税が重く（当初は産出した金銀の二分の一）でも、支払いはそれほど難しくなかったのだろう。ところが、サン・ドミンゴを含む発見地では六、八年ほどで住民の持ち物がほとんど尽き、さらに金を得るには鉱山を掘るほかなくなると、その税はもはや払えなくなった。厳しい取り立てはまずサント・ドミンゴの金山の全面放棄を招き、同地ではその後、採掘が行われる

ことはなかったという。そこで金にかかる税は、総産出の三分の一、ついで五分の一、その後十分の一、最後には二十分の一へと引き下げられた。銀への税は長いあいだ総産出の五分の一のままで、十分の一に減ったのは、今世紀に入ってからである。そもそも初期の冒険者は銀にはほとんど関心を示さず、金ほど貴重でないものは注意に値しないと考えていた。

コロンプス以後の新世界でのスペイン人の遠征は、どれも理由は同じだった。つまり、「黄金への聖なる渴望」に強く突き動かされていたのである。アロンソ・デ・オヘーダ、デイエゴ・デ・ニクエサ、バスコ・ヌニエス・デ・バルボアをダリエン海峡へ、コルテスをメキシコへ、そしてアルマグロとピサロをチリとペルーへ向かわせたのも、この渴望にはかならない。彼らが見知らぬ海岸に上陸すると、最初の問いはいつも「金はあるか」であり、その答えしだいで、その地を去るか、とどまって定住するかをその場で決めた。

莫大な費用がかかり、しかも結果が不確かな企ての中でも、新しい金や銀の鉱脈を探す事業ほど、破滅の危険が大きいものはないだろう。これは、世界で最も勝ち目の薄い宝くじにたとえられる。めったに当たらず外れが多いうえに、一枚のくじの値段が大富

豪の全財産に匹敵するからである。鉱山事業は、投じた資本や通常の利潤を取り戻すどころか、その資本も利潤もろとも呑み込んでしまうのが通例である。ゆえに、自国の資本を増やそうとする思慮深い立法者が、他のどの事業よりもこの種の企てに特別な奨励を与えたり、本来以上の資本をそこへ向けさせたりすることはないはずだ。ところが、ほとんどの人は自分の幸運を不合理に信じがちで、成功の見込みがわずかでもあれば、資金のかかなりの部分が自然にそこへ流れ込んでしまうのである。

それにもかかわらず、この種の試みをめぐって、落ち着いた理性と経験が下す判断はどの時代でも厳しく否定的であったのに、人間の欲はしばしばその正反対へと走った。賢者の石という現実離れた思いつきが生まれたのと同じ情熱が、金銀が尽きないほど採れる巨大な鉱床という、同じく現実離れた考えも生み出したのである。人々は、貴金属の価値が、昔も今も世界のどこでも、主にその希少さから成り立つこと、その希少さは、自然が一つの場所にごくわずかしか埋めず、そのわずかな鉱石の周りを、どこでも硬くて扱いにくい岩や土が取り巻いているため、そこへたどり着き取り出すのに常に大きな手間と費用がかかることから生じている、という当たり前のことを考えなかった。むしろ、金や銀の鉱脈も、鉛・銅・錫・鉄と同じくらい大きく豊富に各地で見つかるは

ずだと自分を納得させたのである。黄金郷エルドラドをめぐるウォルター・ローリー卿の夢は、賢い人でさえこの種の奇妙な思い込みから常に自由ではいられないことを示している。その偉人の死後、百年以上たつてなお、イエズス会士グミリーヤはその驚くべき国の実在を信じ続け、もし宣教師の敬虔な労苦に見合う報いを与える民に福音の光を届けられるなら、どれほど幸福かを、熱烈に、しかもおそらく心から語っている。

スペイン人が最初にたどり着いた地域には、現在のところ、採掘する価値のある金銀の鉱山は知られていない。先に渡った冒険者が得たとされた量も、発見直後に動き出した鉱山の豊かさも、実際より大きく語られていたのだろう。とはいえ、その知らせは同胞の欲望をかき立て、アメリカへ向かった人びとは皆、エルドラドの発見を夢見た。しかも幸運なことに、コロンプスの初航海から約三十年後にはメキシコが、約四十年後にはペルーが発見され征服され、彼らが求めていた貴金属の豊かな供給にほぼ匹敵する現実が、実際にもたらされたのである。

要するに、東インドとの貿易をめざす計画が、西へ向かう航海による「新世界」の最初の発見を促した。新しく見つかった土地に築かれたスペイン人の拠点は、すべて征服を進める計画をきっかけに整えられ、その原動力は金や銀の鉱山の開発であった。しか

も、人間には予想できない偶然が重なったことで、この試みは、当初合理的に予想できた水準をはるかに超える成功を収めた。

アメリカへの入植に挑んだ欧州のほかの国々の先駆者たちも、同じように大きな夢に駆り立てられていたが、成果はスペインほどには届かなかった。ブラジルでは、最初の定住から百年以上たって、ようやく金や銀、ダイヤモンドの鉱山が見つかったにすぎない。イギリス、フランス、オランダ、デンマークの植民地では、今のところ鉱山は見つからず、少なくとも現在、採掘に値するものは知られていない。もっとも、北米の最初のイングランド人入植者たちは、勅許を求める際、見つかった金銀の五分の一を国王に納めると申し出た。ウォルター・ローリー卿、ロンドン会社とプリマス会社、そしてプリマス評議会に与えられた勅許でも、実際にその五分の一が王の取り分として定められた。また彼らは、金や銀の鉱山の発見に加え、東インドへ通じる北西航路の発見にも望みをかけたが、これまでのところ、いずれも成果は上がっていない。